Haru tatsu to, iu baka ri niya, Miyoshino no;

Yama mo kasumite, kesa wa miyu ran. (下に譯あり)

女學雜誌第拾貳號目次

開發。女生徒の女學校へ年始に行く圖●社說。新年ことば。十九の少年二歲の娘孃●新年のけしきいろ〳〵附圖●新報數件●文學。伊勢物語。歌よみの心得。西洋禮式の大概●(第二。途上の禮)。詩歌よむ人の道德●技藝。女ハ一の技藝あるべき事。三味線と西洋樂器の比較。食物の料理に心得べき事●叢話。藝娼妓に關する問に答ふ。日本古代女流の風俗、文伯の母麻を績みし事。小袖の解、羽織の起元。御臺所と云ふ事。御料人と云ふ事、九尾狐●寄書、女學雜誌改良祝辭、和歌三首、詩二首●問答、女の齒黑と眉を削る答、長き夜の母の答●廣告數件

一月十五日

はるたつといふばかりにやみよしのゝ
やまもかすみてけさはみゆらん

●女戒十五條

●常の心ざし無嗜にして女の道正しからざる事
●小事をも愚にして考へなく何かと誹謗する事
●大事をも辨まへなく我心うちとを人に語る事
●主親の深き恩を忘れて忠孝おろそかになる事
●夫をかろしめ驕りに長じ天たうと恐れざる事
●道に背きても榮ふるものをうらやみねがふ事
●正直にしておとろへたるものをかろしむる事
●短慮にして嫉妬の心深く人の嘲りを耻ざる事
●女の猿利根に迷ひ萬事につけ人を譏しる事
●人の中事を企て人の愁ひを以て身を樂しむ事
●人の非とみるとどもてわれ智ありとおもふ事
●下人の善惡を辨へず召仕ひやう正からざる事
●男たるには縱へ親類緣者と云とも親を過す事
●吾に勝れるを嫌らひ已れに隨ふものを愛す事
●人來る時ろの客に對し怒を移し無禮を働く事

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌第拾貳號（明治十九年一月十五日）

●社説

○新年のことば

十九の少年二歳の娘孃

曉の鐘なり亙たりて池の氷自らに解け水頭の柳東風の吹くに連れて躍る遙かに見渡せば茜さす朝日は全地をわたゝめみよし野の山たゞ霞みて立春のけはひを裝ふ茲に新年を迎へて明治十九の初に會し吾人過越し方と想ひ起し未だ來ぬ先と慮ばかりて万感胸に滿ち喜憂交も生じ獨り南窓に據りて先づ新年の新感を記るす嗚呼あゝ天父人類を造りて此の世に住まれしも吾等に父母あり兄弟あり姉妹あり子孫あり郷里あり郡縣あり國邦あり思ふに皆な相ひ睦み相ひ和して共に樂しむべきを樂み相ひ憂ふべきと憂へとして玆に愉快の年月を送らんこと其の御心に適ふ所ろなるべし然るに父母の相ひ和せざるあり親子の相ひ睦まざるあり兄弟と姉妹との相ひ愛せざるあり國と邦と郷里と郡縣と相ひ容れざるの有樣あり是れ豈に天の常數ならんや特に男女は相ひ合して一体となり共に和して一身となり生れては相ひ助け死しては共に悲み不孝不喜あるの間に於て尤も大なる平和を得るの相手あるべくして而も今ま果して如何の景况なる男よく女を愛するか女よく男に護らるゝ乎之を吾國今日の事に思ひ合はせて特に慷慨する所ろあるなり

幸にして二三年來女論盛んとなりて男を尊み女を卑むの風漸く破れんとす吾人の大慶之に過ぎたるはあらず然れども茲に密に省みるときは維新以來西洋の文明年を追ふて此の國に輸入し來り開化の度甚だ高まりたるの德は凡べて是れ男子に益あり男子獨り益したるの利にして女子は之が爲に大に利益せられたる者あるなし漸くにして明治十六年に至り初て日本の社會に孕まれ昨年世に生れ出でゝ今年わづかに新なる年を迎へたり然れば日本の男子は既に十九の年に會して女子は僅に二才の齒に達せりと云ふべき乎嗚呼十九の少年二才の娘孃に合ひて果して何の德かある相ひ助け相ひ樂しむの情如何にしてか之を得なん吾人は娘孃の速に成長して彼の少年に伴ふとあらんを欲する者なり

○新年のけしき

左の一篇は社員巖本善治氏が或る英字新聞用の草稿にとて編述ありたる者にして其の文は既に世に出でたりと雖ども叙事新年の祝言に代用すべきを以て乞ふて之を玆に掲げ且つ同新聞に使用ありたる畫圖をも借用して併せて此に附載し少かあらたまの賀と爲す

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

年たちかへりて暦日新にめぐり來る新年新月は過ぎし太古のふる事のよれかよ現れ來る演劇場なり吾等が禮として慣行する新正の諸式は如何なる意味あるとにて如何なる効能ある譯なる乎固より心に悟り得もせずたゞ數千年前の仕來りを其の儘例として行ふ斗りなり所に由りては此月に新嫁の志りたゝくことあり又た或は縄引きの遊なす國もあり學者若しスペンセル、ラボツクの眼を以て此れ奪女と角力との野蠻風を今に遺すものなりと卑しまれんよは腹立しき限りなり歐米文明の地よも知らず識らずして古代の風俗を其の儘よ行ひ來ると數多あり今ま之を爲したればとて人民野蠻なるよもあらじ吾等自ら行ふ所の正月の禮亦た然り故に心ある人は追々にかゝる無用の禮を廢するとは云へ太古と近古を思ふなくさみよ初月の新景をうつし出して少の禮式の起元を解くと左の如し

○戸々の門前兩傍に門番の如く立ち并んだると門松と云ふ松の國音マツと云ひて祝ひよくる人々をマツ爲めなりとは后世の附會ならん其の結構は松と竹とを各左右に立て列べて間よシメ縄と張り渡し伊勢鰕、橙、柚子、炭、楢葉なんどを此に程よくくゝし付けたり但し此の〆縄を張り渡すとを畧するもあれど本式にては皆な然くなすとよぞ何故に斯る數多の者を用うるやと云ふよ松と竹とは千歳に續く祝の植物なり。伊勢鰕は國音よイセヱビと云ひて威勢あるとを現はし、橙も代々につゞくと意味し。柚子はゆう／＼たる樂しき景色を示し。炭は万代につゞき且つ邪氣を拂ふとて用ひ。楢葉は霜雪にうたれても色かはらぬとて祝ふと云ひ又た新葉の古葉に代はりて續々と生ひ出る体を父子代々の世讓りよ比べたる祝ひとも云ふ。又た〆縄は何事の祝よも用うる者なれば茲にも引き渡すならんが其の起元は定かならず天照太神天の岩戸を出で玉ひし其の昔し初て之を岩戸に引きかけたりとも云ひ又は太古穴居したる比ひ死したるものを其の儘に此穴へ埋めたる上に藤かつらもて最早や開かぬとの印したるが〆縄の起元なりとも云へり斯る事の定かならぬは勿論なれど若し臆説を附せんよはもと／＼神聖なりと云へる神社よは皆な縄ひき廻はして人の入り得まじき樣に縛りけるが是れ〆縄の初めならんか名よも適ひ意味も通る心地するなり

門松は固と如何なる意味よて起りしもの乎或は云く晴明が簠簋内傳よ素盞烏尊巨旦將來を殺ろして其の家を亡し玉ひたる其のあとの志るしよとて巨旦が墓の上に生ひたる松を年の初に門に立るなりと云ひ或は諸事問書、蘭園随筆等よ據り神代には門前に有り合せたる木々よ縄張り渡して不浄の入らざるやうよ

したるが今の門松となれりと云ひ或は世諺問答により殿が家居の前に門なければ松竹を立るしとして立てたりと云ひいろ〳〵なれど固より明ならぬたゞ確かなるハ數多の和歌に由りて証し見るに昔しはたゞ平戸賤が家なんどのみに門松を立てたりとの事なり何處の家にもひとしく立て初めたるは極々近古のことなりと(大抵四百年前來)覺ゆるなり

○さても門松に迎へられながら家内に入り新正の祝賀とて禮をれバ家内にハ蓬萊と云へる三方の上にあまたの品々を載せたるを出し之を客に渡す樣のまねすれば客も亦た之を戴く風情して禮そるなり三方とハ禮式に用ゆる臺なり此の臺の上にハ橙穗俵搗栗、みかん、梅干、榧、柑子、ころがき、昆布、のし、柚、野老、海老、橘、串柿、なんどを積み重ぬこれ等ハ文字、語音、比喩なんどにて皆な目出度き意味ありとの調えなり又た此を蓬萊と云へるハ彼の壽永き仙人の住へる蓬萊島にかたどりての義なるべし

○通常の客ハ此の蓬萊を戴くまねして其の儘に庭口より歸るもあり何ほ親しきハ上に昇りていや正しくに禮し合へば主人は屠蘇と云へる酒を出して饗するなり此の酒は美淋と云へる甘味の酒に本草書に據り効能ありと見ゆる藥劑七種斗りを撰み出して之を三角の袋に入れたるを酒中に浸し邪氣を拂ふとて元日に家内の者相ひ集りて飮み客來れるときも之を出すことなり此の儀ハ支那より傳ハりたることにて後漢の比ろ彼土にて既に行ハれたると歷史に存せりかくて此時に出せる酒肴にはゴマメとて壽を祝し數の子とて子多きに比どるなんど味もなき數多の粗品を出すと通禮なり

○かくて亦た此月新に來るいろ〳〵の人種あり先づ第一に万才とハ昔し一條院の御宇(凡そ九百年前)大江の定基が三河守に任じたるとき其の民に敎て佛敎傳來の因緣を述て舞ハせたるより起ると云へど近古は斯る尊き優の者にハあらぬ風折ゑぼしに大紋の直垂を着し才三と云へる侶一人を伴ひ鼓叩き乍ら三河なまりの祝詞を述べ「やれやめでたう候ひける」とて歌ひ舞ふなり

○又た神樂とて越后の邊より來るものあり大なる獅子の面を冠り一人にて祝をまうもあり太神樂とて頭に一人后に一人ありてくさ〴〵の運動を爲し后ちにハ前なるものを后なるもの丶肩に載せていろ〳〵奇しきかるわざ氣たる遊なすもあり此は固と伊勢太神宮にありたる獅子の面と祝賀の時節のみ持ち出で丶祝ひのまるしよとて舞ひたるが初めならんかと思ハる丶種あり或ハ亦た元來は支那より傳ハりたる風俗なりとも云へり

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

弄ぶ凧は昔し小くて烏賊の形したるやうに造りそめたるより
イカとも云ひ又た其の尾を付けて形の似たるよりタコとも云ひ
しなり此の物もとは關羽の仕はじめしものと雖ども明ならず支
那より傳はりしとのとのみは定れる說の如し或人は正月は一陽
來復なれば小供女子等をして天を仰がしめ或は紙鳶を上げ或は
羽根つかせなりと云へど附會の說の如くきこゆるなり通常は方
一尺程の者なれども時には方六尺程の大紙鳶をあげて大人等の
遊ぶとあり又た其のうしろにウナリと云へる者をつけて風に微
動せしめ響音を發せしむる如き其他いろ〳〵の事あり

○女は羽子をつくを樂とせり或人の說には蜻蛉と云へるものの蚊
を食ひて人の害を除くにかたどりたる祝ひにて蜻蛉の飛ぶに似
せたる羽子をつく祝なりと云へれど信じがたきとなり昔しは婦
娘のみ之を弄ぶとなれど近來は男女うち交りて面に墨ぬりなど
してどよめくあり其樣淸らかにもあらぬ心いたましきこと多し

○又た今は斷えたれど子の日の遊とて正月の初子の日に野山へ
行きて小松を引き又た小松の枝を結びなどして遊ぶとありこれ
尤も風流びたる遊事にして上樣公方の人ならでは爲さゞりしと
あり昔しは之をいたく樂しみとしたればいろ〳〵の優なる歌な
んどありて古書には其のありさまをうつせるも多し

ン」と云ひて叩くとなり或人の說に唐土の鳥とは鬼車と云へる支
那の惡鳥とび來りて大害を爲したることありしを思ふ爲にかゝる
式を爲すことなれりと云へど確かならぬ此れよりは何事か深き意
味ありげなり

○大凡そ正月の禮式は皆な祝賀に非るはなし祝賀とは是れ迄で
あしきと不快の事ありしを去りて新しきに至れりとの事を現は
すものなりされば爲す所の禮式皆な此の意味を示して笑ふべき
こと甚だ多しかの年の暮に厄拂と唱へて戶々に祝の詞を述べあ
るくあり其の祝詞と御厄拂ひませうか厄をとしと云へる言葉に
て凡ての惡靈去りたりと思ふなり又た正月と爲りては寶舟と云
へる舟に寶數多を積みたる繪を元日の夜又は二日の夜寐床の下
に敷きて夢中に吉夢を見んことを希ひ之にて當年中の吉事を卜す
るなんど凡そ惡靈を去り善靈の來らんことを祈禱するの意氣にあ
らざるはなし

右はたゞ新年のけしきの大畧を示したるものにして固より事例
の起元沿革を主として書き記るしたるにはあらぬ左れば述ぶべ
き條論らふべき儀にも特更に筆を省きたる所ろあり門松及び七
種菜の如きに至りては舊稿の「門松の由來」「七種菜畧考」などあ
れば折を見合せて次号に掲載すべしと思ふなり　（完）

●新報

○明治女學校　本紙に度々掲げたる同女學校は追々に盛大となり且つ生徒の進歩も實に驚く斗りなり去年末の試驗には弊社の嚴本善治も參り合はせて自ら試驗したるが孰れもの學力に感歎したり特に同校は專ら德育に注意し品行方正なる日本婦女を養成せんことに熱心して每土曜日に有益なる講談を爲す等は他の校に見ざる所ろ吾等の尤も賛成する所ろなり今月も七日より開校ありて益す盛況なりとの事なれば吾人は國の爲め日本婦女の爲め之を茲に祝すと云ふ

○踏舞と乘馬並に新年の女遊　一昨年來踏舞會なるもの起りて此の遊び連りに流行し近來は又た婦女乘馬の事を獎勵すること盛んとなりしが吾人は余りに之を賛成せず國の爲に喜ばざるなり乘馬の事は暫く措き彼の踏舞の如きは歐米にてすら最上流の孃娘は之をいやしむ程なるに我國の如く未だ男女の交際親密とならざるに先ち早くも斯る遊を爲さんこと實に歎くべきことにて決して有益なる決果は得られまじきなり試に思へ日本にては男女が直接に談話することすら之を愧づる程ならずや此れ固より過弊にして破るべき義にはあれど既に之を愧づると云ふは固より兩方の心中甚だ清潔なる所ろある證據にして日本の男女は未だ如此き事に慣れざるものなり然るに今ま早くも踏舞と盛んにして男女相ひ抱き相ひ擁して飛び揚り舞ひ廻るなぞの事を爲し果して有益の決果あるべきか運動の爲とならば他に方あり交際の爲とならば別に順序あり突然として斯る遊を爲すの度に進まんとは甚だ不賛成なり又た乘馬の如きも固より弊害は少からんとも倘ほ早き所ろあり日本の男子紳士すら去年來初て乘馬を試ることなれり婦女にしてかゝることを先づ獎勵して流行させんとするは順序を知らざる改革論者の言なり。吾人の考にては先づ第一に男女混交の遊事を改良して更に之を清潔にし其の間の交際を爲さしむることにあり此れ第一着の改良方ならん特に正月の遊事の如き途上に於て男女相ひ羽根を追ひ臀を扣き面に墨ぬりて愧ぢざる如きは吾人見て慘然たらざるを得ずかゝる遊事の改良を圖りて然も男女をよく清潔に交際せしむる方法を考ふること上流の婦女の勉むべき所ならん吾人も追々に其の策を世に述べて批評を乞はんとするものなり

○洋行歸りの貴女に望む　所ろは何卒右に述る如き一點に注意し且つ日本婦女は倘ほ甚だ幼稚なることを覺悟し亦た此等を導くは其の任なることを思ひ徒らに西洋に行はるゝ遊事を其の儘に行はらせんと爲し玉ふなく又た只だ上流の婦女を改革せんとのみ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

を企てらるゝなく日本婦女一汎の爲に憂へられんとにあり諸君の一擧一動は日本婦女改革の事に關するや大なり希くは國の爲め道の爲めによく〳〵注意あらんとを切望す

○產後の惡弊　產後の弊とハ產婦が畢生の氣力を出し稍やく分娩せし後ち直ぐに自由安樂に平臥せしめずして無理に足を伸そを禁じ又た力餅とか何餅とか名付けて產婦にこれを食せしむる類ハ如何なる譯にや產前ハともあれ產後に至りてハ母の身体の疲勞ハ實に太甚しく暫時ハ精神恍惚として人心地の付かざる程のものあるに強て身体を束縛し消化器などの活動ハ思ひもよらざる其際に不消化物の第一として近來元日の雜煮餅さへ癈そる者多き世の中となりて尙ほ之を食せしむるハ惡弊の酷しきものと謂ふべし此の如きこそい一日も早く全癈したき者なり

○千歲座の慈善會　同會ハ本日より三日間午前九時より午後四時まで開かれ餘興にハ長唄囃子連中淨瑠理清元常磐津竹本三味線花澤鶴澤等にて鶴龜上の卷祝言下の卷を奏づるよしなり此願書ハ曩に藝妓の名前にて差出したるに許可なかりしかば更に藝妓と雇ふ事として出願したるよしに聞けり

○ノースコット夫人　英國樞密院議長イッデスレー伯（即ち元のノースコット氏）の養女ノースコット夫人ハエキスターの保守党議員某氏の妻なるが先頃議院の總撰擧の節保守党方の貴婦人を助けて同党の爲めに盡力せしに付きエキスターの保守党の婦人數百名相謀り同婦人の巧勞に酬ひんため銀の粧臺一個を贈與したりと云ふ（本年一月十二日時事新報）

●文學

○伊勢物語（つゞき）

此物語の大意好色の事をもつて面てにかきしハ人の好む事をもつて道に引いれんためなり頓阿が井蛙抄にも初心の時ハつねに戀の歌をよむべしそれが思も出來詞をもいひなるゝ物なりといへり儒敎のうへにも易ハ乾坤より初まりて一部陰陽男女の事をしるせり詩の三百十一篇も關雎を始とし國風鄭風みな夫婦の事をしるしおかれたり夫婦の道ハ治亂の端なり小學五不孝のひとつにも妻子を私にして父母のやしなひをかへり見ずといへり好色をしるすとハみだりがハしきをいましめんがためなり人倫の始まる所ハ夫婦なれば無てかなハぬ道なれども淫するときハ人倫をみだり大なる時ハ國をうしなひ少なる時ハ身をほろぼし家をやぶる此故に關雎の詩ハ樂しめども淫せずと孔子もこれを美賜へり易の序卦傳にいはく有天地然後有万物有万物然後有男女有男女然後有夫婦有夫婦然後有父子有父子然後有君臣有君臣然後有

上下有上下然後禮義有所錯といへり佛教にたつるところ五戒の中の不邪淫戒ハ儒にいふ五常の中にハ禮にあたれり禮とみだりにして色に淫せバ內教外典ともにいましむる所まことに人たる類にあらざるべし周の大王色をこのみてその妃を愛せしに內にうらむる女なく外にむなしとその淫せざる事をほめたり君臣父子夫婦兄弟朋友の五のまドハりたゞしきときハこれぞなハち天下の達道人生の大倫なり後なきをバ五不孝の第一として先祖の廟の斷絶する事をいましむれども色に淫してほしゐまゝなる時にハ國をうしなひ家を破り或ハみづから精氣を費して病をうけ壽を縮て漸く子孫を得ざる前にその身をほろぼす尤も愼しまざるべけんや此趣を料簡して此物語を學する時にハ生前死後天地万物の上に醒悟發明の心地にいたるべし佛儒神歌の深源底習ハずしてをのずから明鏡をかけてあきらむべき也

○歌よみの心得

歌の病ひとて心得べきことくさ〴〵ありむかしは四病七病など云ひて爲すまじき詠み方あまたありしが今ま玆にハ近代尤も注意するやまひ四つ五つを擧げて此の道の初學に告ぐ

一　同心病　と云ひて一首の歌の中に同じ心の二つあるをバ嫌ふなりたとへバ

○○○○こがらしの音きく秋は過にしを今も梢にたゝず吹く風

かく同じ意の語上へ下にあるを嫌ふなり此類數多ありて上に去年と云ひて又た今年と云ひけさと云ひて復たあしたと云ふ如きハあしきとなり但し句續きにて例へば人もをし人もうらめしと云ひ或は山の山もりとる山もと云ふ類は苦しからず或ハ亦た特更に同意同語を用ひたる者例へば古への奈良の都の八重櫻の歌の類は反て味あることなり

二　聲音病　とて第三句と第四句又は第五句の終り文字同じときハ聲音きゝにくきより病として嫌ふなり百人一首にある

陸奧の忍ぶもちすり誰ゆゑに○亂れそめにし我ならなくに○

の歌も病あるを免れず又た

しほかまの浦ふく風に霧ハれて○八十島かけて○出る月かげ

の如く第三と第四と同じきが特更に聞きにくければ病として愼むべきなり

○西洋禮式の大概

第二　途上の禮

男子と婦女と同行する時ハ男子ハ常に婦女を助けて之を保護すべし

群集の中又は梯梯を登る時等も男子婦女に先ちて行くべしと雖

ども通常は其の后ちに從を禮とす
客と共に自分の馬車に乘る時は客を上席へ(馬に向ふ方)に座せしむべし但し婦女は婦女の客に非ざれば上席を讓る可らず
男子と婦女と共に乘車する時は若車の時男子先づ下りて婦女を扶けて下すべし
男子途中にて知己の婦女に邂逅し之と談話せんと思ふ時は決て止りて談話す可らず婦女の行く方へ共に歩みながら談話すべし但し婦女若し老人にて行歩に難きときは男子も亦たゆるゆる歩むべし
男子若し途中にて朋友に邂逅するときは左手にて帽をとるべし婦女に邂逅するときは特に然り決して点頭す可らず
男子と婦女と同席するときに於て吸烟する前に婦女の許可を得べきのみならず途中にて婦女と行き違ふときにも知己と不知已とを問はず其の烟筒を一時口より取り去るを禮とす
途中にて朋友に邂逅するときは男女に拘はらず漫りに其の名を大聲にて呼ぶ可らず
男子婦女と同行して其の手又は臂を婦女に執らせ之を扶くるには左右のいづれをも擇ばず
馬行の途中知己の婦女に邂逅するときは唯だ拜禮して過るは可なりと雖ども馬上にて談話するは非禮なり必ず下馬して馬を牽き同行し乍ら談話すべし

○詩歌よむ人の道徳

詩又は歌は人の心を感動して必竟は之を善に導かんとのために世に益あるものなれば之を詠まんとする人も成るべく其の心得が大切にて平素道徳の事に心を寄せ心志を高尚になし居らねば適はぬとなり昔しより一篇の詩又は歌にて國民の愛國心を惹き起し人心の腐敗を警醒したる例數多あり古今集の序にも目に見えぬ鬼神をもとりひしぎ猛けき武士の心をも泣かすと云へり然る程に感動を起す力ある詩歌なれば之をもし惡しき方に用ひしならば又た非常に人心を惡の方に感動せしむるものとなるべし我國の歌は古來皆な戀歌にして百人一首中戀れ情をよまぬ者は眞に尠ある斗りあり未だ曾て世の道徳を醒まし世の民心を鼓舞する類ひの歌あるなし然れば詩歌をよむ人々特には此の道に力を入れて遂には一の專門ともなすべき婦女方は成るべく此の事に注意して平素道徳上の心志を養ひ詠み出る玉の語は皆な國家に益あるものと爲し玉ふべし然らずては如何程に人心を感動せしめ得るの詩歌なりとも其の感動せしむるとの多きに隨て益す國家を害するものとなるべきなり

●技藝

○女は一の技藝あるべき事

日本の婦女ほどに無藝なるはまことに歎くべきことなり一朝夫死すれバ先づ賃仕事にて日を暮し得るハ最上等の人なりあしきは身を賣りて禽獣に似たる行を爲るか左なくば親戚の厄介となりて一生を無用に送るに過ぎず此れと云ふ一の技藝なければ到底一人にて獨立することが出來ません有樣は甚だ歎くべき極であります西洋の諸學者がいろ／＼に研究する所に由りますれば男と女とハ到底違ふ所ありまするなれども男の智力熟練にて決して出來ぬことが女に出來るもの數多ありまするよし物事を深く考ふること例へバ高上の哲學を修るとか又は新なる器械を發明するとか云ふことは女ハつまり男に及びませんなれども小説を書りて人情を穿つとか歴史を記して古今の事を確に人心に思ハするとか畫をゑがきて万物の美を現ハすとか彫刻に人の形体をうつすとか寫眞の如く裁縫の如く編み物の如く時計師の如く音學の如く凡そ手又は指を要する精細の仕事に至りてハ皆な女の優る所であります故に女にして若し奮發刻苦しまするならバ其の爲し得べき仕事ハ實に數多くして其の爲に巨万の富を得ることも望み難きに在らず一身を獨立するなどハ固より心配に及バぬことでありまするを今の如くにたゞ男の力にのみ委頼して居りましてハ到底女の權利の伸る時ハなく又た日本國の強くなることハありません今ま日本人民は三千七百万ありと申しましても其半が女ならバ眞に日本國の爲に働く者は一千九百万人程しかありません然るに此の一千九百万人の男ハ皆な一人づゝの厄介者を養なふべき有樣でありますれバ必竟其の半分の仕事しか出來ませず日本にハ結局の所ろ九百五十万の人民よりなき割合となります故に女ハ成るべく勉めて一の技藝を修め獨立することが大切であります此はたゞ其一身を安全にして其の權利を伸バし得るのみにハあらで日本國ハ之が爲に大に富強となり日本國民が突然として大に增加するわけであります婦女諸君は何卒此に心掛ありたきとなり

○三味線と西洋樂器の比較

三味線が我國に傳ハりたる由來は前号に一寸記したる通りにて余程緣故あるものにハ相違なく現今にて先づ尤も多く行ハるゝものにして特に東京などにてハ其の一手にても心得ざれば嫁入の出來ぬ程の始末となれるなれど吾人の意見にてハ成るべく此を癈し代に西洋の諸樂器特にピアノ、オルガン、などを流行させたしと存じまする三味線の音はもとより淫奔固有のものにハ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

あらざるかを知らぬと云へども之に由りてまことに哀れなる音人を感動せしむる音鬼神をなかしむる音愛國慷慨の曲などを奏でんとは難からんと考へます支那人が云ふ所ろの鄭聲とて人の心を淫らにし穢らはしき歌に合はせるには宜しからんが斯ることは成るべく廢止したきことであります斯ることを男子が爲すすら愧かしきことなるに最も愼むべき婦女の手と口とにて斯く人心を腐敗せしむる業を爲すは尤も歎べき極であります何卒かのピアノ、オルガンなんどを流行させて人心を清潔にし人心を鼓舞し心中愛親の念を惹き起すやうに致し度と思ひます。斯く申さば左ありては三味線の如く容易なる道具ならざるより何人にても弄び得ることが出來まじと云はるゝ人もあらんが固とかゝる技藝は何人にても學ばねばならぬと云ふ譯はなく音樂を一の藝として立身の爲に習ふ人のみが致して宜しき譯ゆゑ決して斯る心配にて三味線を司とする理はありません

但しかの淨瑠理に用うる三味線は強ちに他の常盤津清元などと同日に言ふべきことにもあらねば之を存することも不同意はありませねど今の如く何處の婦女も皆なく三味を弄び弄ぶときは必ず淫奔の曲を奏して樂しむ如き弊風は全く止めたきことと考へまする子供等が不行跡ありとて歎く父母はありますれども自分がみだらの樂を奏で淫奔の歌を唱へ居りながら其子を善に感化せんとは決して望み得まじきことではありません技藝を習ふ人々はよくよく此の一事にも心を注がれたきことあり

○食物の料理に心得べき事（二）

凡ろ食物を料理しまするには温湯にて烹ることもあれば蒸氣にて蒸すこともあり又た油あげの方もあれば火に炙ることもありますなれども必竟何故に料理を爲ることあるかと申しますれば大切なる五つの目的を之によりて達し得るからの事であります偖て何を五つの目的と申すかと問ひますれば第一に滋味を增すことであります第二に食物を柔らかにすることであります第三に食物を温かにすることであります第四に消化を容易くすることであります第五に食物の中にひそみて在りまする色々の毒虫毒物を殺ろす譯であります此の五つの事は料理をせでも得られませんゆゑに前申す如く燒きたり炙たり煮たり蒸したりする義であります

然し此の五の目的の中ち時によりて其二つ又は三つ丈けを達せんとして他の三つ又は二つを搆はずに置くことがあります例へばマグロを甘く食べたいと申して之を煮もせず又た炙りもせぬ所云るサシミと致して食べることがありますが此は第一の目的を得たいと申して他の四を搆はずに置きましたる料理方であります

又た病人などに食べさせます時の料理には此と全く違ひたとひ第一の目的は達し得られませぬとも他の四の事を成るべく成し得るやうにして料理いたすです故に料理は場合に隨つて各異るものには相違ありませんなれども扨て如何なる料理方が尤も宜しきことであるかと申しましたらば勿論前申す五の目的を悉く達し得られますやうに致すとなるべきは甚だ明白なる義でありませう

然し今一つ注意して置くべきことがありまするは抑も食物なる者は只だ人の口慾を滿足させるのみの者でなく又た只だ僅かに人の生命をつなぐのみの者ではなく成るべく人の身体を丈夫にして活潑に働かせ肥太に健康となりて無病息才の大男女となさせべきための者でありまするゆゑに之を料理するにも成るべく其の食物の滋養分と申す即ち身体の養ひになるべきものを失はざるやうに致さねばなりません例令ひ味淋や砂糖をませて口に適する程に甘く煮ましたればとて大切の養分もその爲に全くなくなりまするやうに煮ましたらば食物の効德はなきも同然であります故に前に申す五の目的を心得て料理しまするも共に此の一事をもよく〳〵考へ合せて成るべく人の身体に効德あるやうに料理することが大切であります

然るに今日我國の婦女方が料理し玉ふ有様を見れば此の五つと一つの事をすこしも心得らるゝことなくして口の爲に甘く食べらるべきものをとぎ〳〵に不味し滋養になるべきものを特更に害あるものとなし玉ふこと多しまことに歎くべき限でありますれば少か御心得の端となるべき箇條を追々に申上ませう

● 叢話

○藝娼妓の事に關して或る人の問に答ふ

左の一篇は明治十八年十二月發行の講道會叢説第三篇第六冊より抄録せしものにして同會長西村茂樹氏が或人の問に答へられたる筆記なり今や世上の道德大に腐敗し士人學士中に於て公然汚穢の言行を爲して恬として愧ぢざるものあり婦女改革を以て任とすると云ふ者にして尚ほ藝娼妓の惡德を不可とせざる者あり人心の道念甚しく衰へて德義淸潔の風殆んど滅せんとするに當り世に如此き論あるを見るは吾人の尤も大賀する所なり吾人曩に廢娼の論を草して少さか世に訴へたり希くは諸君之に參看して志念を確定し其の同胞姉妹が禽獸同界に墜落せるの景況に慷慨して女德改良の事に熱心せられんことを希ふと云ふ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

或る人問ふ、先生數々言論を以て藝娼妓の風俗を隳り社會を害するとを說きたまへり然れども愚を以て觀るに藝娼妓の中にも其の志操の堅き者あり才氣の勝れたる者あり勤敏なる者あり慈善なる者あり決して之を以て禽獸と同視すべき者に非ず又其の藝娼妓に陷るも自ら好んで之を爲す者少なく或ひハ幼年の時身を娼家に賣られて自ら脫するを能はず或ひハ父母の困窮を拯はんが爲めに身を苦界に沈むる者ありて其の情、實に憐むべき者甚だ多し古來より妓流中に間ま泥中の蓮花を出すハ是が爲めなり先生の深く之を惡みたまふハ未だ其ハ當を得ざるに似たり如何

答　本邦ハ妓流中に人物あるは實に吾子ハ言の如し是余が殊に深く世道人心の爲めに歎息する所以なり余嘗て聞く歐米諸國にも亦娼妓の甚多きと吾邦に異なるとなし然れども其妓たる者は皆な放逸淫蕩の惡婦にして固より貞操の何物たるとを知らず況して父母の爲めに身を沈むると云ふが如きは絕てあるとなし故に少しく其身を修め世人の敬重を得んと欲する者は決して足を妓館の地に容るゝとなしと是誠に宜しく然るべきとにして歐米諸國の文明たる所以なり然るに本邦は是に反し其事實吾子の言ふ所の如き者あるは何ぞや余原因を推考して其說を得たり蓋ゑ吾國人(殊に中等以上の地位に在る人)が道理に昧くして正邪醜好を辨別するの智なきに出たる者なり夫れ藝娼妓の業の溷陋なると禽獸に齊しく妓樓の地の汚穢なると糞槽より甚し然るに世の士君子たる者道理に通ぜず藝娼妓の賤業たるとを知らず妓樓の汚穢なるとを知らず惟已が情慾に刺衝せられて汚穢の室に入り賤陋の婦と暱し自ら以て無上の快樂を得たりと爲す世の文人たる者亦た皆な道理に晦く或は小說を著はし或は院本を作りて藝娼妓の事を稱贊し放蕩子弟をして之を欽慕するの意を發せしむ娼家亦た巨利を獲んと欲し高樓傑閣を作りて俗人をして其業の汚穢なるを忘れしめんとす是に由り庸俗の輩は藝娼妓の汚穢の業たるとを知らず藝娼妓を以て萬金の家の妻と爲して之を怪まず(士君子の妻室にも亦藝娼妓より出る者あれバ萬金の家にて之を妻とするは怪むに足らず)世間に行はるゝ言行錄の類を見るに貞女烈婦と娼妓とを並べ擧て之を記し觀る者之を怪しまざるに至る人心の尊卑淸濁を辨ぜざるは之を以て徵すべきなり是時に當り民間の婦女其の父母の困窮に逢ふ時は忽ち挺身して身を烟花に沈めて自ら悔いず然る所以の者は其一は藝娼妓となる時は其金を得ると他の業を爲すよりも甚だ多し其二は藝娼妓の業の甚だ汚穢賤陋なりと云ふとを知らず其三は小說劇場に

於て大に此の如き擧動（父母の爲めに身を賣るが如き）を賞美せるを以て自らも榮譽なりとして之に趣く其四は藝娼妓と爲る時は或は良家の子弟に親しみ良縁を結ぶことを得るの望あり是民家の女子が身を烟花に沈めて恐れざる所以にして又た藝娼妓中に或は良品の女子ある所以なり若し國民皆な道理に通じ藝娼妓の甚だ賤業たることを知りて之を賤辱する時は此の如き女子も必ず容易に身を烟花に沈むることはなかるべし然るに今ま尋常民家の女子をして此四條の如き望を生せしむるは實に風俗の頽廢せる徴表にして妓流中に良品の女子あるは世道人心の爲めに深く痛惜すべきことなり夫れ世の士君子正邪好醜を辨知することは能はざるよりして良善の婦女をして藝娼妓とならしめ良善の婦女の藝娼妓となりたるよりして良善の子弟益々之に惑溺す展轉相承けて社會の害毒を爲すこと滋甚し歎息に堪ふべけんや

余西國の歴史を觀るに絶て妓女の事を載たる者なし言行録を觀るに絶て妓女の言行を記したる者なし人名辭書を觀るに絶て妓女の名を見ることなし蓋し其所行の賤惡なるを以て是を正人の間に雜へざる者なり是を以て民間の風俗大に妓女を賤しみ王侯貴人の宴會は旨ふに及ばず公衆會合の席に妓女を招く等のことなし此一事にても東國文明の遙に西國の文明に及ばざることを知るべし今日本邦の士君子は皆西國の開化を崇び西國の事と云へば善惡を論ぜず盡く舊を棄てゝ之に倣はざるはなし獨り蓄妾と聘妓との事は支那朝鮮の悪風を學びて少しも之を改むるの意なし縱令電信鐵道全國に布蔓すとも士君子の品行此の如く婦人の位地此の如くんば決して文明國と並べ馳することは能はざるべし吾儕道徳を講ずる者いかんぞ矯正の任に當らざるべけんや

○日本古代女流の風俗

坦庵主人

我國の上古は妻を娶るに新室を築きて其の妻を住まはせしものと見え須佐之男命が櫛名田比賣を娶りたまへるときに出雲國なる須賀の地に宮を造り歌よみ玉ひし其の歌に云ふやくも立つ出雲八重垣つまごみに八重垣つくる其のやへがきを（つまごみは妻隱にて妻を入れすまはする爲に八重垣を回らし丶室を作りたりとの義なり）と有をれもふべし」又たむかしは今の世の如く妻を男の方へ迎へ取りし者には非ずして男より妻とせし女の許に往くが例にてぞありける枕双帋に甚しうしたてゝ婿とりたるに云々催馬樂に婿の大君きませ云々などあるも皆な女の方へ男を迎ふるを云へるなり業平朝臣が紀の有常の女に往きしと云ふも通婚せしにて凡て物語書に女の家に往くといへるは夫となりて妻の家に通ふことなり女を妻として其の家に入るは唯だ天皇

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

のみなりき
南石云く女の方へ通ふと云へるとハ確かなる証據数多あれど妻の為に家をしつらふと云へるハ如何にや進歩の跡に就て考ふるも上古に妻の為に家を製し后世に其の家へ行くと云ふこと明ならず但し上古も定れる妻なく所云る混通なりしよし己一人の妻とせんと思ふときは之を隠さん為に八重垣とも云へる家を作りたるか

附て言ふ斯く夫の方より妻の方へ通ふより同母の兄弟は相ひ知るを得たれど異母の兄弟姉妹ハ全く他人の如く相思ひ遂に相ひ交ハり通じたるとなべての行なりしと云へり婚姻の制明ならざるときハ勢ひ禽獣に似たる行を知らざるの間に行ふととなるなり人々よく／＼鑑むべし

斯て上古も妻を娶るにハ近世の結納の如きものを約束さだまりたる時に男より女に贈れり其の贈り物ハ鶏またハ草木の花などなり女よりも男に車器などを贈りしこと書に見えたり然れど一定なるにハあらず其の國其の郷にて殊なりて種々の式ありしなり或る里にてハ男女が大樹と廻りて約束をなし或る郡にてハ男女互に相ひ對し女ハ男の左の手を取り男ハ女の右手を取り共に産土神に盟ふも有りしときく又たある書に奇なる風俗を載せり夫ハ穂々出見命の四海に君臨し玉ふに當り先帝の遺詔を奉じ諸島に行幸けるが先づ壹岐の島に渡り次に對島に渡し給ひしとき其の國なる上縣郡フカムレの里に一個の佳人あり一男これに婚せんことを欲ひて片履を其女の戸内に投しに女とりて納めかれば遂に二男の争となりて公訴とハなりぬ此時供奉の大臣にて兒屋表春の命といへる人婚姻ハ必ず媒酌に依り父母の承諾を得て其の式を行ふべき大典を示して之が勸解をなし〻とぞ然れバ對馬の國にてハ往古片履をもて婚姻の約を結びしこと知られたり（斯る事等を誌し〻書は正史にあらざれバ虚實の程ども知れねど正史にハ大方ハ王家の事件にして民間の風俗など詳にしがたければ稗史野乗に由りて其の欠を補へり）安康天皇紀に依て見れバ男より女の方に申し入れしとき若し之を諾へバ其の信契として女よりも男の方に物を贈れることを知るなり安康天皇元年二月天皇大泊瀬皇子の為に大草香皇子の妹幡梭皇女を聘せんと欲ひ根使主をして大草香皇子に請ハしめ玉ひし時大草香皇子大に喜びて其の諾べなへる丹心を呈さんとて秘藏の寶なる押木珠縵てふものと天皇に捧んとして根使主に附し〻ことありき

○文伯の母麻を績みし事

（次号へ）

公父文伯は魯の君に仕へて大夫の官に昇れり或時文伯朝廷より退き母敬姜に見えけるに敬姜麻を績み侍べりければ文伯勞ひ諫められて我官に仕へ祿を賜りて何の乏しきこともさふらはざるに自ら斯く賤しきわざに苦勞し玉ふこと心得侍らずと申ければ母うち嘆きたる風情にて誡しめ仰せらるゝに汝の如き道理を辨へざるもの大夫の官に備へ置き給ふ程に魯國の政事正しからずしてやがて亡び侍りなんいで〳〵我が勉めて麻をうみ惰らざる道理を語りてきかせ侍るべしそれ肥えたる地に住む民は才あらず瘠せたる土と耕す民は義に向ふものなり如何にとなれば肥えたる地は耕作にさのミ力を入れざれども生計易くして其民常に樂と爲す樂なれば必ず奢の心出來て惡念萌すものなり又瘠たる地は朝夕耕し耘るに骨を折らざれば僅の活路と得がたし苦勞を知るものは物每に思慮あるによりて奢の心更になくして善心自ら生ずるもの也されば上天子より下庶人に至る迄活とし生けるもれ一人として食に飽き衣暖に空しく其所作を勉めるものはあるべからず我寡女の身となりて汝父の誡めなければ官に仕へて惰たる心出來先祖の名をも汚し侍らんかと朝夕恐れをなし心を安ぜざるに只今惰を我に示すこと是れ即ち家を亡す基なりとて大に怒り責めければ孔子此事を聞き及び玉ひ女の身として斯る金言は類ひ稀なることとて深く感じ玉ひ即ち此詞を記錄に載せ置せ給ひけるとなん

○小袖の解

小袖と云ふと上古は裝束の下に着する衣服をば袖とて袖を大ひにしひろ袖にして着したるなりそのうちきの袖の大なるに對して常の衣服をば小袖と云ふなりかたびら單物あはせにても袖を小くして袖下を丸くしたるは皆な小袖なりわた入たるばかりを小袖といふはあやまりなり

○羽織の起元

羽織と云ふは本は鳥の羽にて織たる故の名なりといふ人もあれども心得がたし鳥の羽にて織たる衣服のこと舊記に見えず小袖着たる上にはふりかける故の名なるべしはふりと云ふは放の字也はなつともよむ字なり上より帶せずはなち着にきる也はふりと書てはおりと云事はあふひと書てあをひと云に同じ例なり其詞に付て羽織と字を付けたるなるべし

○御臺所と云ふと

貴人の妻を御臺所と云ふとは御臺盤所と云ふと畧したる詞なり飯のことをだいと云女の詞に飯とおだいともぐごとも云ふと上﨟名の記にも見えたり膳のことをば臺盤と云ふ其臺盤を置所を臺

盤所と云今も食物を調ふる所を臺所と云ひ臺盤所と云を畧したる詞なり男は表に居て家の仕置其外表向のことをつかさどり女は奥に居て夫の食物を調ふるはづのことなる故臺盤所にて世話をそる心にて御臺所と云ふなり貴人なれども人の妻たる者の所作と忘れぬ爲の名なるべし

○御料人と云ふこと

人の妻を御料人と云ふこと料はむからふとよみて内所の事どもを取まかなふ故なり御料と云ふも御料人を畧したる詞なり今時人のむすめのことを御料とも御料人とも云ふ人ありあやまり也よめ入せざればいふまじきことなり

○九尾狐

玉藻前の謠曲にて那須野に殺生石の故事と世人のきゝなれ且つ過し年妖狐傳といふ冊子なども印行したることありしからに九尾狐といへば惡狐とのみおもへり古くも下學集琉球神道記などにもこの俗説を載たり下野なる玉藻稲荷に社はかの惡狐の靈を祭れるとかやしかはあれど九尾狐はもと瑞獸にて已に太平御覽に山海經、竹書紀年、呉越春秋、白虎通、古今註、魏畧、郭璞九尾狐贊等を引用せり因に云ふ官妓を九尾狐といへること侯鯖録にありこれは官妓の聲色のために人の蠱惑せらるゝを狐に魅さるゝに喩へしなるべし

●寄書

○女學雜誌改良祝辭　磐城　芦野明日香

明日香謂ハク此雜誌ノ改良ハ即チ日本女子ノ改良ナリ日本女子ノ改良ハ即チ日本國風ノ改良ナリ日本國風ノ改良ハ即チ日本ノ中等開化ヲ變ジテ上等文明ニ化スル所以ナリ上等文明ニ化スルハ即チ日本ヲシテ歐米諸國ト對立シテ秋毫モ愧ヅル所ナカラシムル所以ナリ此雜誌ノ改良其係ル所豈ソレ淺少ナランヤ

評　賞譽過當ナリト雖モ吾人ノ精神亦タ斯ノ如キノミ

よな〳〵の松のあらしも聞なれて靜けくそめる山のたくかな
　右宮城縣大書記官の女（十四年）　和達つね子

かせさむみわざと開きて見渡せば高峯よりまづふれる白ゆき
　右同縣學務課長芳賀直咲の女（十五年）　芳賀まつ子

老が身のすぎしむかしを思ふにもおどろかきぬる年のくれ哉
　右仙台服部京子

○雪中觀梅　中橋　松井小楓

庾嶺爐峯望奈何。清寒徹骨冷吟哦。褰簾不獨爲觀雪。雪最多邊梅最多。

評　窈窕嫻雅。兼有清紫之兩美。

○春寒　岐阜　近藤とら女

春寒若水洒輕羅。殘燭影中情種多。聽盡紅欄干外雨。梅花消息空如何。

評　姿致婉麗。眞箇閨秀口氣。

又云　第二無量情趣。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

●問答

○我國婦人の歯を染むること(十三)眉毛を剃ること(十七)に答ふ
今は大抵婦人の所為なれども古は少女の内より歯を染め眉毛を剃りたるなり此事は神代の頃ろありしこと古事記に其と思はるゝ事の考あれども其事少し計りにては盡し難し今より幾千年前よりありしことなり西土の古書共に我邦をさして黒歯國と云へりさて女の子六七才に至れバ歯を染むること源順和名抄に見えたり又た源氏物語に紫の上十才まで歯を染めざりしををろかりしとて源氏の君紫の上に歯を染させ眉をもをとすことあり又源氏よりの物なる建内記と云ふ本に關白の御娘七才の時始めてかねをつけ玉ふに眉をもをとし玉ふこと見えたり今は民間等變して婦人のすることとなれり(下野師範校、渡邊平)

○長き夜の歌の答(十五) 正月二日の夜みつ夢とて家ごとに寶船の繪を枕にしくこと昔しよりのならはしなりその寶船の繪にての廻文の歌をかゝり此歌その意何ともわきまへ解しがたし柳亭翁の説にこの歌は九月頃の詠吟なるべきをいつのほどよりか初夢にして寶船には書きくはへけん歌のこゝろは長き夜すがらに十府にねふることなり十府は十府の菅薦などふるき詞にて十府の枕といふこともあり舞の伏見常磐にとふのうらなしといふとも見えたりかくあるによればすべて敷ものといへるかみなめざめは廻文なれバしひて説べからずなみのり船は船のつくりやう常とは別なるか俳諧世話燒草の附合ゐ戸といへるになみのり船とありうゝれバ波よけに戸などある船などにもあるべしこの歌かなづかひの誤り詞のことわりなくとゝのはざるは回文なればなるべしといへり(在東京、石原くめ)

正誤

前号の新報中に記載したる私立大坂女學校の女教師山田淳(アツ)子は播磨國加東郡の人にて姫路の人にはあらざるよし御本人より正誤申來られたれバ之に粗漏を謝す○又た列傳、小野の小町の歌にいたとあるはいはの誤りなり

廣告

○謹賀新禧 女學雜誌社々員 再拜

小生事務多忙ニ付參舘新祝ノ禮ヲ欠ク乍略義本紙上ニ於テ代賀ス

本郷弓町一丁目二十番地 近藤賢三

○向辱知諸君 恭賀新年

歌文添削並淑女諸卿ノ需ニ應ズ

磐城國東白川郡竹貫驛寓 蘆野明日香

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

○文學叢誌　一册郵税共六錢十册前金同五拾六錢○第六號目次毎月貳回

論説○日本の學風改めざる可らず、碑文に記すい如何なる文体を用ゆべき乎○作文金言數件○文の体格法の辨○過ぎたるい及ばざるが如し、詞人と詩人、詩の源流、點化の法、助字い助字なり置字にあらぞ、叙事の十一法、用事の十四法○譯文法、道風朗詠集の事を紀す○新聞記者詩歌文集(六)詩五首、成島、鈴木、大江、關、小室、歌一首、岸田等の諸君○菅原道眞の傳○助子活法(テの字の解)、古文のと、讀書十六觀○古文眞寶講義(三)○雜錄、文章家僧大典の話、學者文人に子なきい如何、雅俗の説、奇異の言葉い遺いぬがよし、祝儀い脩儀の音轉か、惺窩羅山二先生○寄書、詩五首、文一章○外國語移入の説○雜報數件○諸報告○一月八日發行○見本六錢封入

發行所　東京芝西之久保櫻川町八番地　萬春堂

大賣捌　女學雜誌社

○癈物利用　近藤賢三著　大鳥圭介君題字　津田仙君序　一册郵税共五拾五錢　一名すたれ物用ひ方　既刻

無用の物を變じて有用の品となし巨萬の富を得たる河村瑞軒は云ふ一度び眼を開けバ路上の塵芥皆な黄金なりと思ふに世間尙ほ用うべきの癈物甚だ多し徒らに之を癈棄して不景氣を歎ずるい實の山を傍觀して手を空ふそるが如し著者之に慨し多年如此き癈物の利用法を究め且つ博く西洋諸國に行いるヽ製造の秘法と探り漸く新法八十餘條を得平易の文を以て此書を編集したり何人にても此方法を實行して無用の品を有用の途に利用せバ國の富を増し家れ益を興す實に難きにに非ぞ

右前金よて賣捌仕候　東京本郷弓町壹丁目　女學雜誌社書籍部

○詩文添削　添削料郵便切手代用ナラバ三割増但シ一錢切手ノコト

絶句一首一錢五厘○律一首三錢○排古各一首六錢○文一篇八錢
但シ五百字迄ノ〻五百字以上廿五字毎ニ五厘宛增加

東京麻布區富士見町廿番地　稻村城山

社告

●本社い前金御拂込なき間い雜誌發送不仕候間御注文の節い必ず代價郵税共御送付可被下候●郵便切手代用い堅く御斷り申上候但し實際不便不得止の地に限り一錢郵券一割增にて御送金可被下候●爲替ハ東京本郷郵便局へ向け御振込被下其爲替券を弊社に送付可被下候●通運便と以て御送金の節い通運賃い勿論同社より弊社への配達料(壹錢)とも御拂置き可被下候●詩文和歌發付等の原稿御投寄の節い作者の國郡町村姓名等明細に御記入可被下候

女學雜誌代價郵税表（府内無遞送料）
毎月五日發

	正價	郵税	合計
一册	金四錢	一錢	現金五錢
十册	前金卅八錢	同十錢	前金四十八錢
廿册	同七十錢	同廿錢	前金九十錢
卅册	同壹圓	同卅錢	前金壹圓卅錢

廣告正價表

一行一回掲出	但廿八字詰	前金五錢
同三回以上	同	同一割引
同六回以上	同	同二割引

女學雜誌賣捌所

東京神田區淡路町（大賣捌）巖々堂
東京神田區雉子町　園々社支店
同日本橋區新葭町　眞明堂
同日本橋區馬喰町二丁目　自由堂
同京橋區木挽町壹丁目　萬字堂
同京橋區銀座二丁目　山口福松
同牛込區肴町　活神堂
岐阜縣美濃國笹土居町　星菱書房
越後國長岡　大橋書房
大坂備後町四丁目　岡島支店
東京芝西久保櫻川町（支局）萬春堂

發行所　本局　東京本郷區弓町壹丁目廿番地　女學雜誌社

持主兼印刷人　大庭宗吉
編輯人　近藤賢三

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

驛遞局認可

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY